

アザーンのことゑ

大野 真智子 茨城

母よ

伊 沢 玲 千 葉

並び立つ誘導灯のきらめきに迎へられたり夜の空港

はるばるとイズミルに來つ枕辺の闇をゆらしてアザーンのことゑ
窓の外に褐色の曠野ながれゆく労多かりけむ往時のキャラバン
さんざめくバザール通り横道に入れば書店のやうな静けさ
秋の陽のひかりのなかを黙しつつ黒きアバヤのひとかたまりゆく
パンとチーズの香る食事を重ねきてひたぶるに恋ふ日本の白飯

指先のいたく冷たき母の手を両手でつつむ血潮よめぐれ
この母がわれに授けてくれし血のかよへる手もて母をあたむ
昏睡の母の心のみづうみの渚に寄する波になりたし
酸素マスク浮くほど大きく口をあげあらん限りの息を吸ふ母
生きるとは息することと渾身の母がさいごにをしへくれたり
この世からとほくはなれてゆく母よこの世にたつたひとりの母よ

見納め

久 葉 堯 埼 玉

足摺野路菊

土 屋 美代子 神奈川

放棄田にハーブを育てる青年に父祖の家売る託すごとくに
売り渡す生家見めぐり竈神、廁神にもお別れ申す

茶花にと母の植ゑにし佐助がこつそり咲けりこれで見納め
いつよりかこの古庭に棲みつしし蝦蟇よおまへも達者で暮らせ
佳き日なり遠き縁の婆さまに甲州百目の枯露柿たまふ
これやこの枯露柿甘し二個食べて長者のやうにこころ足らひぬ

庭隅のひあふぎの花咲き終へて烏羽玉の実が秋の日に光る
葉の散りて裸木となりし庭の梅に尉鷲きて明日は立冬
しもつきの日々読みつげりわが友の第二歌集の『記憶の繭』を
「何しても張り合がないよ」夫逝きて十年過ぎたる友ひとりこつ
黄金の大塔に似て寺庭の公孫樹もみちが午後の日に照る
分けくれし友は逝けども白小花ぎつしり咲けり足摺野路菊

見えざる芯

相川 佑 太 東京

秋のごきぶり

前 中 映 東京

祖父のためスーパ―三軒はしごしてやきいも買ひし冬の日ありき
かたはらにもう祖父はなしこがねなるやきいもの蜜いぬとわけあふ
人体に見えざる芯のあることを知りたり在宅介護三年
かはらの石をつつめりほのじろき夜の両性具有のひかり
人間のほひあふれるデバ地下にザッハトルテを買ひもとめたり
イルミネーション見つつ歩けば歳晩の顔つきになる人間と犬

夏といふバックボーンを失つておろおろあゆむ秋のごきぶり
今われに三分といふ時間あり駅におにぎりのラップをひらく
巻き尺をからから鳴らし男らが〈売物件〉を測りはじめつ
映像に血まみれの顔 ウクライナの女性兵士はみな志願兵
三人ときんもくせいの香を乗せて真昼のバスがバス停を発つ
てのひらを見せたら泣いてしまふからにぎりこぶしをぶんぶんと振る

義父の影

柴 田 佳 美 東京

御風の背中

真 島 陽 子*新 潟

病床でからだを起こす義父の影しばらく雨に濡れてゐない影
補聴器がおほきくみえる義父のかほ目のあかるさに心慰む
はるかなる北斗七星ひきよせてその柄杓にて手を淨めたし
「ワシだけど、ワシだワシだよ」詐欺だらう。三日月に似た受話器をおろす
耳遠き義父が電話でしらせくる義母の転倒かたゆふぐれに
くれなゐの落ち葉いちまい冬の水にしたがひてゆくいまのしづけさ

海風に古きガラス戸鳴りつづく相馬御風の文机ある部屋
歌集 歌書ならぶへしみずで三島手の珈琲カップをひとつあがなう
糸魚川大火の空を飛び荒ぶ火玉を語る老舗の店主
図書館の「木蔭歌集」の棚かこみわれらは若き終二に出会う
K・Iと終二の恋がよみがえる二十世紀の図書室の隅
東京をのがれてのちをふるさとにこもりし御風の背中进行

解らぬままに

塚 本文 代 福 井

日陰してにはかに冷ゆる生垣の紅きさざんくわ咲きそめて冬
心待つ鳴き声ならん朝空のあなたに見えてこはくてうなり
柚子の実の油胞うつくしせつせつと生き来し母の透きとほりつつ
陽のあたる蜜柑うつくし遠き日に母が点した明かりのやうな
晴れわたる冬のみ空は覗いろ病み臥す母の声にも似たる
これの世は結局わからぬことばかり解らぬままにまた歳をとる

時代遅れのコート

今 井 由美子 岐 阜

モノトーンしつとりと胸に沁みきたり昭和レトロのフォト展にゐる
うす墨を流したやうなたそがれは時代遅れのコートが似合ふ
ため息をつけば胸処にしづもれり（諦め）といふ言葉の余韻
ゆつたりと過ぎゆく時間ときの温かさ母とふたりのコーヒータイト
置きものの（梟）ひと鳴きすることし山里のカフェは森閑として
遠き日の子らの華やぐこゑ聞こゆイヴの夜更けの銀色ブーツ

まるばのき

桑 原 博 大 阪

かはいいと思ふ心にはじまらん野鳥さがしも自分さがしも
自撮りせし妻は大きくわれ小さし背にびつたりとくれなゐもみぢ
うぐひすと思へぬ声でやぶに鳴くあれがさうだと妻と聞く秋
二人歩く道にたぶのき、くぬぎありひのきの林に入りて小暗し
山茶花の赤をのがれてまるばのき芭蕉の愛でししづけさに咲く
まるばのきに芭蕉の好みし花咲きてばんばんと歳月はあり

言い訳

飯 田 進*兵 庫

雪が降るしばし探した和菓子屋に張り紙があり「配達中です」
午前二時ホンダのスーパーカブの音あれば新聞配達の声
当たつても嬉しくもない「熊」という今年の漢字、令和七年
言い訳は言い訳だから言い訳を絶対しなないと言い訳をする
てのひらでしつかりおさえて逆目には気を付けながら削る鰹節
比喩じゃなくメッキが剥けて現れる地金の色にうつとりしている

三日月宗近

小野 はつね 兵庫

檜の実ひろふ

百留 ななみ 山口

思ほえずつきしたため息聞きとめて友は笑ひぬ秋の陽の中
金網が囲む空地に咲きたりいちりん十一月のたんぽぽ
〔読み聞かす〕じごくのそうべえ〔六歳は〕こくらくよりもじごくがいいな
風落ちし冬の夜に聴く「月光」の無言のごとき音のつらなり
たれか呼ぶけはひにふりむく古書店の書棚に立てり上林暁
ねむられぬ冬の夜闇にさえずえと刃光らす〔三日月宗近〕

感染性廃棄物容器

康 哲 虎*兵庫

みかん穫る

浅野 千里 香川

不特定多数の虫が喰つてゐるバグるバズるを操る虫が
愛をくださいとセロテープに書いて蜘蛛の巣にはるクリスマススイブ
丁寧な文字を書かない医師がいて謎が解けない臨床検査技師
感染性廃棄物容器に捨てました白いマスクと汚れた言葉
あと何年生きるのだろう雨水を雨水のまま飲めないわれは
天国は草の匂いのするところ動物たちと話せるところ

色づける櫛通りをゆく紳士魔術師のやうな杖を振りつつ
陽のさして時にきらめく中空のレース 罍とはうつくしき網
逆光の黒きヨットは灘沖をゆるやかにゆく過去曳きて
みかん穫る山の畑に聞こえる潮騒けふはこと荒々し
みかん穫る。からだを伸ばす 反らす 折る 捻る 蹲ふ 曲ぐ 跪く
傾斜地にみかん穫るとき踏ん張つてこむら攣りさう いけないいけない